

パリ断章 1994-1995 (Ⅲ)

山中哲夫

CCV

死ぬということは、この地上から姿を消すということだ。

CCVI

晩年のモーツァルトの音楽には死の影が差している。ト短調ではない。ニ短調でもない。それは変ホ長調の中に仄見える。クラリネットの響きの中に。

CCVII

異国の都市に住んで死を想うとは奇怪なことだ。ここがニューヨークやロンドンやミラノだったなら、このようなことは想わないだろう。ここに住めば、異邦人ならば誰でも死を想う。他人の死にしろ、自己の死にしろ。誰もが死についての哲学者になれる。誰もが『マルテの手記』の冒頭の一節に納得する。青のピカソの真の意味が理解できる。そうして、顔が土色に変色してゆく。

CCVIII

パリは寒い。それでも今年は暖冬だという。滞在一ヶ月目の頃、わたしは寒くてたまらなかった。個人暖房の友人のアパートマンにはまだストーブに火が入ってなかった。上着の上にコートを羽織って縮こまっているわたしを見て、友人が笑った。彼の知り合いの中国人もアルメニア人も同じ

ように笑った。彼らは薄手のワイシャツ一枚だった。ワインを飲んで談笑しているうちに、ようやく暖まってきた。パリ生活に慣れるということは、まずこの火のない部屋の寒さに慣れるということなのだ、と悟った。

CCIX

寒さ。寒気。からだの外からやってくる寒さにはどうやら慣れてきた。少々の冷たい外気に当たっても、もう震え上がることはなかった。そのうち、別の寒さが身の内からやってきた。からだの中からやってくるこの寒気は、どうすることもできなかった。寒気、というより悪寒。今日一日何事もなく無事に部屋にたどり着けた、という安堵感とともにやってくる悪寒。治安の悪い都会に生活する者の、常に背筋に感じる悪寒。やがてその次には孤独の寒気がやってくる。

CCX

午後十一時半すぎのR E Rのサン＝ミッシェル駅構内。プラットホームのむこうで、警察犬を連れた憲兵が二人、一人の男の襟首をつかまえて、激しく壁にからだを打ちつけている。男は壁に頭をぶつけながら、哀れな声で「シルヴレ！」と許しを請うている。それでも黒づくめの軍服の男二人は手をゆるめない。締め上げられている男はおそらく麻薬の密売人なのだろう。しかしどちらが犯罪者か分からないような扱い方だ。日本からきたある若い娘は、黒づくめの憲兵を「カッコいい」と言ったが、この光景を見てわたしは背筋がゾツとした。

CCXI

フランスの憲兵は「ジャンダルム」という。昔のG Iのような、黒い四角の帽子を被り、黒づくめの服とズボンに、頑丈な長い編上げ靴を履き、腰には銃と無線機を携え、常に二人で組んでパトロールする。身長一八〇センチ前後の大男ばかりで、巨大な警察犬を伴っている。R E RのB線ダ

ンフェール＝ロシュロー駅で彼らの一団が乗り降りするが、市民警察と異なって、何か異様な感じを与える。「ジャンダルム」というフランス語は憲兵という意味の他に、権柄ずくの間人、威張り散らす大女という意味があり、動詞になると、声を荒立てる、カッとなる、激しく抗議する、という意味になる。「ジャンダルムの恐れ」という表現は、罰を受けることの恐れという意味である。古今東西、憲兵は似たようなものであるらしい。憲兵の憲兵たる所以か。

CCXII

レ・アールのビデオテークで『人情紙風船』を観る。日本では観られない幻の名画をパリで観られる幸運に心から感謝。快いテンポ。会話も場面転換も。随所に見られる象徴と暗示。大店の箱入り娘と手代の濡れ場を聞いている人形の陰影濃いアップは、『晩春』の床の間の花瓶を想い起こさせた。雨の使い方のうまさ。冒頭と結末の照応。距離をもって描かれた人生と運命。そして日本の抒情。なかでもわたしの心を打ったのは、夏の雲だった。ビデオテークを出て、真夜中のレ・アールを歩きながら、隣の裏に、この戦前の日本の夏雲がいつまでも浮んでいた。あの世界に帰りたいとしんじつ思った。

CCXIII

友人は、父親が亡くなったとき、長兄から日本に帰ってくるなと言われた。親族の恥だからという。友人の妻は幼い頃、あなたさえ生まれてこなかったら、と貧しい母親から言われた。この二つの言葉が、二人を結びつけた。ある日、瀕死の鳩を拾い上げて、二人で看病した。鳩は死に、二人はプーローニユの森に埋めに行った。湿った土に埋められる鳩は、自分たちの姿だった。

CCXIV

イタリア館の共同食堂の窓から投身自殺した哲学科の青年。彼とは一面識もなかったが、その食堂はわたしがよく使っていた食堂だった。死が自分のすぐ身近にあったことに驚いた。と同時に、当然のことものように思われた。当然のことに思う自分に改めて驚いた。

CCXV

夕方、ラ・シテ通りを右岸のほうへ歩いてゆく。あたりはとつぷりと暮れている。寒い。花市場に出る。裸電球の赤い燈がぼつりぼつりと灯っている。ときおり人影がよぎる。クリスマス用のポインセチアの真っ赤な鉢植の花が並んでいる。裸電球に照らされたその姿はいかにも寒々しい。友人の画家のヴェルニサージュに招待されていたので、温室のような店内に入って、薔薇を数本買いもとめた。フランスでも、薔薇は驚くほど値段が高かった。それ以上に目をみはったのは、花束にして包んでくれるその包装の見事さと美しさだった。どこに隠されていたのか、あざやかなピンク、黄色の美装紙を目の前にひろげて、あっという間に薔薇を包み、セロハン紙と銀紙にまばゆい真紅のリボンをつけて、華やかな花束が一本出来上がった。魔術師のような手つきで編まれた花束の神秘。この国では花束も一つの芸術かと感心した。それまでの周囲があまりにモノトーンであっただけに、いきなり目の前に出現した華やかな花の包みに、啞然となった。

CCXVI

ミラボー橋。十五区と十六区を結ぶこの橋を渡って、アポリネールはマリイ・ローランサンに会いに行った。この橋はやがて別れの橋となる。現実のミラボー橋はアポリネールの詩から想像されるような詩情はまったくない。木偶の坊といった何の変哲もない鉄の橋。ただ、橋脚のアーチが人が手と手を繋いだように見えるところだけが、詩を髣髴とさせる。それだけである。橋のたもとには有名な詩の一節が刻み込まれている。それもか

えって味気ない。橋に佇む。夕陽がセーヌ川に落ちる。ボン・ヌフヤボン・デ・ザールとは違って、ここからながめる夕陽も素っ気ない。このように何から何まで散文的な橋のたたずまいが、かえってわたしにアポリネールの悲しみを追想させた。実人生とは常に散文的なものである。それゆえにこそ、言葉によって、珠玉のポエジーが生まれるのだ。アポリネールはその好例。

CCXVII

毎日のようにカフェに入り珈琲を飲んでしていると、珈琲の滓で前歯が黒く汚れてくる。食事の度毎にワインの栓を抜き、壺を空っぽにしていると、ワイン抜きの食事が味気なくなってくる。昼夜を分かつ毎日街を歩いていると、石畳を歩かない日は、自分が病人になったような気持になる。ほんの六ヶ月ほど前までは、米を食べ、お茶を飲み、アルコールなど殆ど口にできなかったのに。殆ど歩かず自宅と研究室を車で往復していたのに。夢の中にはもう日本人は現われず、フランス人と何やらフランス語で会話している。そんな自分が次第に不思議でなくなっている。日本は遠い夢の彼方に退き、代わりに、それまで遙か地球の裏側の異郷であったパリが、いま目の前にあり、わたしを取り囲み、わたしに語りかける——もうこの掌からは逃れられぬ、と。わたしはいったい何者なのか。この問いに宙吊りになりながら、今日も歩く。

CCXVIII

《酔いたまえ、常に酔っていなければならぬ、それがすべてだ。酒でも詩でも美德でも何でもかまわぬ、酔っていること、それがすべてだ——酔いが醒めたとき、風に星に鳥に時間に訊きたまえ、すべて移ろい過ぎゆくものに向かって訊きたまえ、いまはいかなる時か、と。それらは答えるだろう——いまは酔うべき時だ、と。》ボードレールの有名な散文詩の一節を記憶を頼りに書いてみた。二十歳のとき、この一節にわたしはボード

レールの覚醒を見た。常に酔っていなければならないという醒めた精神を、彼の内に見たと思った。いまにして思えば若気の至りだった。単なるレトリックじみた解釈にすぎなかった。ボードレールの精神は覚醒というにはあまりに深い。深すぎる。常に酔っていなければならないとしか言い様なかったのだ。瞬時も醒めることなく、常に、常に酔っていなければならない。この「常に」には名状し難い宿命の影が差している。ある意味では、常に酔っていることは、醒めていることよりもつらいことなのだ。パリに来てそのことがはじめて分かった。

CCXIX

パリの街は人を詩人にし、画家にする。見るもの聞くものすべてが、詩の一節のようであり、タブローの一部のようである。しかしそれらは、甘い旅情に酔い痴れたシャンソンの安っぽいメロディーであり、観光客相手に売られるモンマルトルの絵葉書の風景にすぎない。邦訳の『枯葉』のように、ベレ帽を被り、パイプをふかした、ステロタイプ化したパリの詩であり、パリの絵である。この贗物のパリの表皮をめくってはじめてパリアの実景が目の前に出現する。しかし、これはなかなか難しい。パリに十年住んでも、このパリアのイメージを完全に払拭することはできまい。それがパリアの魅力であり、またパリアの罠でもある。

CCXX

論争。自分の論理を相手に押しつける。やがて論理のための論理となり、屁理屈となる。相手も同じ。それであいこ。喧嘩両成敗。

CCXXI

死期が近づいたとき、人はできるだけ長く生き延びようとする。一日でも長く、一時間でも長く、この世にとどまりたいと切望する。死がまだ遠い存在であったとき、一日も早く死にたいと願った、その人が。長生きす

ればするほど人はさらに長く生きたいと欲望する。七十まで生きた人は八十まで、八十まで生きた人は九十まで生きたいと思う。命を惜しむ人間のこの心の在り様ほど不思議なものはない。

CCXXII

わたしは自問する——ところで、おまえはどうか。死期が近づいたとき、おまえは命を惜しむか。一秒でも長くこの世にとどまりたく願うか。たぶんそう願うだろう。なぜなら、わたしにはやるべきことがあり、それを果たすまでは死ねないから。しかも、この「やるべきこと」には終りが無い。したがって、いかに長生きしても、わたしの死は仕事の中断に他ならない。その意味では、死は常に人生の中断であって、完遂や終焉などではない。

CCXXIII

あれほど夢に憑かれ、夢と現実の境を見失って、己れ自身すら、夢と化してしまったかのようなネルヴァルの、その代表的な作品の中で、もっとも多く使用された単語は、「現実」であった。このパラドックスは興味深い。おそらく——もっとも多く死を語った哲学者は、もっとも強く「生」に執着した哲学者だろう。激しく愛を歌った詩人が現実の恋愛と縁がうすかったように。

CCXXIV

文学研究や哲学研究において、語彙の使用頻度というこの数字にたぶらかされてはいけない。精神分析医は、患者が何を言わなかったかにもっとも注意を払う。隠された言葉こそ、もっとも重要な言葉なのだ。ランボオの有名な『母音』には黄色が出てこない。三原色の一つであるにもかかわらず。もっともランボオらしい、もっともランボオにふさわしいこの強烈な色が、彼のこの詩には欠落している。マラルメのすべての詩の中には一度たりとも「^{ヴェール}緑」という語が出てこない。「^{ヴェール}緑」は「^{ヴェール}詩句」であり、「^{ヴェール}詩句」

はマラルメにとって、常に危機的なものであるからだ。すなわち——
「^{クリーズ・ド・ヴェール}詩の危機」。

CCXXV

日本の大学。出席のためにだけくる学生。十年一日のごとく同じ講義を繰り返す教授。剽窃だらけの卒業論文。学生の剽窃を見抜けず、感心しきりの愚かな審査官。研究費欲しさに、基礎科学をおざなりにして、応用科学の実益ばかりに夢中になる研究者。論文の本数ばかりを稼ぐ、教授になりたい助教授。下は教養の語学授業から、上は大学院の演習にいたるまで、惰性と怠惰と無関心と無力と功利主義だけで成り立っている、この日本の大学ほど、世の中にかがわしいものはない。大学は二十年以上も昔とくづくに崩壊しているにもかかわらず、いまだにそのことに人は気づかず、他愛ない幻想を抱きつづけている。かろうじて体面を保っただけの最高学府は、内情が火の車の昨今の銀行と変わるところがない。いや、日本という国、日本人という人種がいままさにそれだ。

CCXXVI

セレット教授。ヴァレリー研究の世界的権威にして『カイエ』刊行の編集責任者。大学のゼミでは、フロイトの夢の理論をシュールリアリストたちのテキストに応用していたが、彼女の分析にはまだ文学の薄皮が張りついていた。わたしは純粋に精神分析の立場から、彼女が分析したテキストを分析し直してみせた。文学の薄皮を剥いで、生の肉と骨を見せた。六十を越えたと思われるこの老婦人は、わたしの赤裸々な分析に、若い娘のように顔を赤らめた。意外にうぶな老女性教授に、わたしは好ましい印象を受けた。

CCXXVII

ブローニュの森の一劃にあるバガテル公園。薔薇で有名なこの公園の

片隅に、小川とも言えぬ小さな川が流れている。あたりは木立や茂みに覆われ、足もとには低い草花が植えられて、細くうねった小径が川に沿ってのびている。せせらぎの音が水の反映に響き合い、ベンチにすわったわたしの心を和ませる。パリにこんな静かな場所があったとは。田舎の小川を思わせる、こんなのどかなひとすみがあったとは。目をとじる。耳もとを何か羽虫のようなものが掠める。春の午後、人影はなく、陽射しはどこまでも暖かい。大きく深呼吸する。冬の間溜まったさまざまな滓が残らず外に吐き出されたような気持になる。近くに白い花が咲いている。名もない春の野花。川面のきらめきが目に痛い。身も心も消毒された気分。少しの間だけならキリスト教徒になってもよいな、と思った。

CCXXVIII

神は人間が創り出したものである。したがって神は人間の心の中だけに存在する。人間が神を忘れ去ったとき、もはや神は存在しない。「神」というこの言葉すらも死語となるだろう。もう殆どそれに近くなっている。

CCXXIX

「恋」という文字にも、「愛」という文字にも、同じように「心」という文字が含まれている。しかしその文字は「恋」では下に、「愛」では真ん中にはめ込まれている。これは偶然にすぎないが、面白い偶然だ。「恋」の心は下肢に、「愛」の心は胸にあるということか。真夜中、漢字に飢えたわたしは、机の上にこの二つの文字を書いて、空想に耽る。

CCXXX

人生は人を疲れさせもするが、また癒しもする。愛に疲れ愛に癒されるように、人は人生に疲れ、人生に癒されながら生きてゆく。そのようにして歳月が流れ、ふと立ちどまり、越し方をふり返り見たときに、自分が人生を生きてきたというより、自分の上を人生が流れていったという感懐を

人は抱くことだろう。過ぎゆくのは時ではなく、己れ自身であるというのに。これもまた人生の癒しの一つか。

CCXXXI

画家と言葉。フランスで暮らす日本人画家は早くフランス語を覚えるべきだ。それは何も流暢に話せることによって画廊主とうまく商談できるようになる、といった皮相な意味ではない。確かに画家は言葉ではなく絵で勝負する。絵が素晴らしければ、フランス語など話せなくとも何の問題もない。そうかもしれない。しかし、よりよい絵を描くためにはその国の言葉を覚えるべきだ。フランス語という言葉が、ちょうどワインが臓腑にしみ込むように、画家の精神にしみ込んだとき、そのとき画家は周囲の風景や生活と真に一体化し、フランス的な美しい白を表現することができるようになる。画家と言えども、言葉を侮ってはいけない。十年生活してもろくにフランス語が話せない日本人画家がたくさんいる。彼らの絵には何が欠けている。

CCXXXII

タピエス展。切り裂かれたタブロー。露出した傷口。ざらついた現実。ルオーのように、モジリアニのように、作品に「痛み」を感じる稀有な画家。タピエス——鉤形の宿命の傷を負わされた、バルセロナ生れの異邦人。ほろ屑や落書きを芸術にまで高めた男。あるいは人生の奈落到沈んだ芸術家。

CCXXXIII

三千年後か四千年後か五千年後か分からないが、人類が減びてゆくのは確かだ。その頃、パリの街はどうなっているだろう。石の建造物は崩れ、エッフェル塔も腐食し瓦解して、すべてが砂礫の下に埋まっていることだろう。セーヌ川はまだ流れているだろうか。ナイル河のように遺跡の上を

滔々と流れているだろうか。マロニエの木も凱旋門もない荒寥とした白い大地を、細々と流れつづけているような気がしてならない。ゆるやかな丘陵だけとなったモンマルトルの丘を遥か右手にながめながら。

CCXXXIV

深夜。サン＝ミッシェル河岸のタクシー乗り場で、特派員といつくとも知れないタクシーを待つ。底冷えがする。「あの夫婦はいつもあんなふうですか」特派員がさきほどの出来事を思い出してわたしに訊いた。乗車拒否にあった友人の奥さんが、怒ってタクシーのドアを激しく閉めた。中国人の運転手は、何をするんだという顔つきで降りてきた。友人が取りなした。結局、夫婦はシャトレまで歩いていった。夫が酔っ払った妻を引き摺るようにして。もうメトロはなかったが、「麻薬をやっていると運転手は思ったのでしょうか」わたしは答えたが、サン＝ミッシェル橋のむこうに消えていった二人の姿がいつまでも心に残った。

CCXXXV

日本人が経営するある学習塾を通じて、子供をブローニュのサン＝ジョゼフ校に入れることができた。その学習塾の代表者が、日本人の父兄四、五人を相手にカフェで話をした。話題はユーロトンネルになった。フランス側とイギリス側の双方で線路を敷いていって、最後にトンネル内で接続しようとしたとき、レールの幅が合わないことに気づいた。仕方なくイギリス側がフランス側に合わせた、という話だった。その真偽はともかく、万事この国ではこのように鷹揚なのだ、と結論づけて、愉快そうに笑った彼の表情が印象深かった。元は旅行代理店に勤めていたというこの学習塾の代表者は、フランスの「鷹揚さ」に惹かれてここに居つづけているのだろう。日本では息苦しくて暮らせないのかもしれない。まだ若い奥さんたちを相手にトンネルを掘る話をしてみせた、彼の精神分析はひとまずやめておこう。

CCXXXVI

フランス人の合理精神と個人責任主義。赤信号でも車が通らなければ平気で渡る。信号は人間のためにあるのであって、人間が信号のためにあるのではないらしい。規則と秩序と清潔を重んじるドイツ人は決して渡らない。道端に吸殻を捨てることもしない。口唇性格と肛門性格の違いでもあるだろう。SNCFで数人分の切符を買うと、ただ一枚の切符に人数が記載されているだけである。なるほどと思った。人数分の切符を発行するのは無駄というわけだ。ワインで顔を赤くしながら平気で運転する。酔っ払って事故を起こすのは本人の自由、本人の責任ということだろう。南仏レ・ポアの断崖絶壁には柵さえ作られていない。「強風時には気をつけよ」という立て札が一本立っているだけ。それもそばに寄って見なければ読めないほどの小さな立て札。

CCXXXVII

フランス人社会は規則や秩序以外のもので動いているような気がしてならない。それは森有正が言った「良識」^{ボン・サンス}だろうか。よく分からない。ただ、「常識」^{サンス・コマン}では動いていない。「常識」を超えた何ものかによって動いている。とにかく、しぶとい人種だ。

CCXXXVIII

情。じょう。なさけ。この言葉はフランス語には訳せない。「sentiment」は“感情”である。怒りや喜びといった喜怒哀楽を表わす言葉にすぎない。情緒や情感に通じるこの「情」という日本語に正確に対応する言葉が、フランス語にはない。フランス語にないということは、そういったものをフランス人は心に抱かないということだろうか。日本人男性とは異なって、フランス人男性は簡単に女性を捨てる。言い寄るのもしつこいが、別れるときはあっさりと別れる。いつまでも一人の女性を思いつづけて鬱々とし

ていない。日本人男性は情が絡んで簡単に相手を捨てられない。男女の立場が逆になってもこれは同じかもしれない。「愛^{ジュ・テーム}している」は単なる言葉にすぎないのだ。

CCXXXIX

わたしの恩師の一人が、かつて川端康成の『伊豆の踊子』をフランス語に訳したことがあった。翻訳していて、「旅情」をどう訳すか困惑した、と彼は言った。結局、「sentiment de voyage」と文字通りに訳出したわけだが、わたしはそのとき——まだフランス語科の学生だったが——むしろ「nostalgie」と訳すべきではないか、と反論した。しかしまいにして思えば、「nostalgie」ではフランス人には通じなかったかもしれない。ドイツ人のように自国に真のロマン主義を持たなかった彼らには、骨と皮だけになった味気ない「sentiment de voyage」の方が、かえって理解しやすいかもしれない。千羽鶴を千本の羽をもった鶴と解する国民である。あの折り紙の輪郭の美しさと精神性は、日本家屋や寺院の屋根が描くそれらと同じく、到底理解し得ないものではあるまいか。われわれがバリの風物にヨーロッパのエキゾチズムを感じるように、彼らは折り紙や屋根に東洋のエキゾチズムを感じるだけだろう。

CCXL

春のモンスーリ公園。濃い下草の緑を背景に、あざやかに浮び上がった赤や黄色のチューリップ。色とりどりのパンジー。傾いた木にぶら下がって遊んでいる子供たち。日光浴の乳母車。園内のレストランもテラスに料理を運ぶようになった。池にはさまざまな水鳥がいて餌を啄んでいる。バケツから残った野菜を放り投げる婦人。ベンチでは学生がパン屑を鳩にやっている。敏捷な雀が横から掠め取る。いつも餌をさらわれてうろろしている鳩。表通りに面した一割に、黄楊^{つげ}か何かで刈り込まれた世界地図がある。アフリカ・インドまでは正確な形に刈り込まれていたが、それより

東は曖昧で、日本は、と見ると、北海道も四国もなかった。当然のことだろう。われわれがアフリカや中東を正確に描けないのと同じことだ。

CCXLI

よく言われることだが、欧米に暮らす日本人は大きく二つに分類される。一つは、日本人であることを嫌い、欧米人の中に入って、彼らと肩を並べようとする人種。当然のことながら、こういう人たちは常に欧米語を使い、欧米式の生活をする。特に同国人を前にして、それをひけらかす。同国人と出会っても挨拶もしない。日本語を使うことを恥と考えている。欧米人にたいしては卑屈なまでに愛想がよい。もう一つの人種は、欧米社会にしながら欧米人を嫌い、日本人同士で日本語を使いながら、欧米人にたいする不平不満をおちまける。こうした欧米崇拜と日本回帰は明治時代から少しも変わっていない。このような日本人の心性には、一つの共通したものがある。それは、欧米社会と欧米人にたいする劣等感である。他のアジア人種にはあまり見られないので、どうやらこのようなコンプレックスは日本人独特のものであるらしい。

CCXLII

晩年の川端康成は好んで東京駅のステーションホテルに泊まった。そこには旅の匂いがしたからだ。いかにも日常が旅であった人らしい。パリには、街全体に旅の匂いがする。観光客が多いからではない。わたしが異郷の旅人であるからでもない。パリに住む人ほど「人生」という旅を感じさせる人間はいないからだ。シャンソンの名曲が殆どパリで生まれパリを舞台にしているのも故なしとしない。パリは旅情を感じさせる世界で唯一の都会である。「人生」の旅情を。そして、死を。

CCXLIII

ノートル＝ダム寺院の深夜のクリスマスミサ。凍てつく^{バルグイ}前庭の広場には

大勢の人々が群がり、スピーカーから流れる司祭の声を聞いている。見上げると降るような星空。群衆をかきわけ、ようやく寺院内部に入る。洞窟の中のように荘重に響き渡る合唱隊の歌声。「アーメン」と応じる参列者の声。一瞬の沈黙の中に、かすかに聞える、天井の梁にとまった鳩のくぐもった鳴き声。午前二時すぎ。外に出るといつの間にか小雪が舞っていた。セーヌ川沿いのカフェはタクシー待ちの人々でごった返していた。神はもういないが、かつて神がいたその名残を感じつつ、わたしはカフェで熱い珈琲を啜った。

CCXLIV

フランスでは、クリスマスに本を贈る習慣がある。わたしは友人から、ポエジー叢書版の現代詩人の詩集をもらった。彼の友情が有難かった。彼とはじめて出会った頃、わたしは詩を書いていた。わたしにたいして彼が抱いたイメージは、ショート・ピースを口にくわえて詩を書いている文学青年であった。あれから二十数年たっても、彼が抱いたイメージは昔と少しも変わっていない。わたしに、もっと詩を書け、と励ましているのだな、と思った。だからなおさらこの贈物がうれしかった。うれしかったと同時に、悲しくもあった。たがいの現在の境涯を思うと、遣る瀬ない気持ちにもなった。ありきたりの言葉だが、青春は美しい。その美しさは、醜い中年になればなるほど、いよいよ艶やかになりまさり、懐かしく思い返される。諦めを積み重ねてきた者の目には、すぎた青春はまぶしすぎて直視することはできない。自分の青春であっても。いや、自分の青春だからこそ。

CCXLV

田舎町シャルルヴィルと厳格な母親から解き放たれたランボオの解放感
は、『谷間に眠る男』の肉感的とも言える色彩表現によく表われている。
印象派以前にあのように強烈な色彩表現をなし得たことは驚きだ。ランボ
オの資質もあったろうが、十六歳という年齢が書かせたとも言えるだろう。

十六歳はときとして奇跡をもたらす。生の充溢が死に接近する、という意味でも、まぎれもなく十六歳の作品だ。

CCXLVI

英語やフランス語では明快に自己主張をするその同じ人が、日本語を使ったとたん、もってまわったような曖昧な言い方になる。言葉だけではない。表情や行動様式も同じように曖昧になる。これは外国人には理解できないことだろう。日本語や日本人の表情、行動様式のいたるところに「他人の目」が意識されている。それが曖昧さの原因である。気配りがかえって心の交流を複雑怪奇なものにし、障壁にすらなっているのだ。ことに外国人を相手にしたとき。このことは自我の未熟さと深い関わりがある。

CCXLVII

イタリアやスペイン、またオランダやドイツから帰ったとき、フランスが母国のように懐かしく思われた。シャルル・ド・ゴール空港に降り立ったとき、心の底からホッとした。もう目の前にパリの風景がひろがっていた。あそこには彼がいる、あの通りにはあの人、たくさんの知り合いの顔が浮んで、懐かしい気がした。あのレストラン、あのカフェ、あのギャルソン、あの公園、使い慣れたさまざまなメトロの駅、また郵便局や銀行の顔見知りのフランス人の顔も思い浮ぶ。パリにはわたしの日常生活がある。安堵感はこのためであるらしい。

CCXLVIII

フランス人の議論好きは殆ど病気に近い。フランス人自身がそう言うのだから間違いない。テレビ番組ではどこかで必ず討論をやっている。なかでも政治討論がもっとも面白い。いかに相手を言い負かすか、そこに自己存在のすべてがかかっている。言い負かされ、引き下がると、その瞬間からその人は無となる。無力の無であり、無能の無である。ニュース番組で

敵対する勢力の二人がゲスト出演する。司会者が相手に話させようとしても、話をやめない。社会党のジョスパンがそうだった。いかに相手を打ち負かすか、その極意は、相手の話を聞かないことである。これは街頭のカフェの政治談義でも同じ。交通事故での示談も同じ。謝れば負けである。だからなかなか示談にならない。

CCXLIX

余命数ヶ月となったとき、他人が語る死についての言説のことごとくが、絵空事のように思えてくるだろう。そのとき信を置くに足る唯一のものは、死にゆく人の言葉のみとなろう。死を間近に控えた人の死についての言葉は傾聴に値する。たとえそれが、ヒステリックな恐怖の叫びであろうと、身も世もあらぬ哀願の声であろうと。死に遠くあるどんな大哲学者の箴言よりも、死が差し迫った凡人の一声のほうにはるかに重みがある。わたしもまた凡人であるがゆえに。同じ声を発するだろうと思われるゆえに。

CCL

悟りを求めて仏像を彫る仏師の姿は、迷いの姿である。「もの」に拘泥しているかぎり、決して悟りはひらけない。祈りも同じである。祈念は揺れ動いている姿の投影に他ならない。なにものかを求めたり、なにごとかを祈念することは、その本来の対象からどんどん遠ざかってゆくことを意味している。童心に戻ろうとする心は、まぎれもなく大人の心である。この世になにものかを書き残そうとする、この心の欲はしたがって、煩惱と呼ばれる。限られた己の寿命の中で、いったいなにほどのものがこの世に書き残せよう。空を見よ。樹木を見よ。鳥の声を聞け。それで十分ではないか。

CCLI

ブローニューの森近くの瀟洒な館。マルモッタン美術館。モネの睡蓮に

取り囲まれる。あたりに客はなく、静寂の中で風に揺れる柳の葉音が聞える。バシュラールはモネの睡蓮を夏の朝の思いがけない贈物と呼んだ。わたしの目の前にひろがる睡蓮は、晩夏の夕暮の忘れ物のようだ。次第にかすんでゆく老画家の目のように、わたしの目もとらえがたい藍と紫のうす闇の中をさまよう。水の動きに惑わされて、花がどこに咲いているのか、ふと見失いそうになる。ちらちら動く柳の細長い枝が目障りだ。日本画の様式に倣いながらも、これらの大きな絵の連なりは、紛うかたなき油絵である。どこから見ても西洋人が描いた西洋の絵である。屏風や襖絵ではない。れっきとした「壁画」あるいは「天井画」である。モネの中にしっかりとテンペラの伝統が生きている。

CCLII

地下鉄のジャン・ジョレス駅を上がって、ジャン・ジョレス通りをシャルル・ド・ゴール通りへと歩いてゆくと、やがてブローニュの森の外れが見えてくる。ここはロンシャン競馬場の裏手にあたる。その森の入口近くに、一本の大きなマロニエの樹が立っている。五月上旬、その巨木に一斉に白い花が咲く。わたしは樹の下までゆき、日陰になってひんやりとした樹皮を手で撫でる。パリ植物園のピュッフォンが植えたプラタナスの老木は慈父のようだったが、このマロニエの樹は慈母のように優しく、心地よい葉ずれの音を立てている。プラタナスの老木に手を触れたいくなるのは真冬の季節。冬枯れの姿がわたしにヨーロッパの精神の厳しさを教えてくれた。ブローニュのこのマロニエの樹に触れるのは、春の花の季節。覆いつくすような白い花の群で、凍てついたわたしの心を和らげ、磨滅したわたしの感性をいたわってくれる。

CCLIII

歌。立原道造は夕すげびとを歌った。伊東静雄は赤ままの歌を歌うなど歌った。大木惇夫は「言ふなかれ、君よ、わかれを、世の常を、また生き

死にを」と満月の南支那海上で別盃の歌を歌った。歌には散文にない独特の力がある。歌によって人は愛の苦しみに耐えることができる。死の恐怖に打ち勝つことができる。知性や批判精神を麻痺させる危険性も孕んでいるが、言葉に言葉以上の力をあたえることができるのも、また歌なればこそである。現代では、この歌が消失している。

CCLIV

歌が消えたことと、現代の作家に文体がなくなったこととは、何か関係があるように思われてならない。現代の作家の文章を読んでいて、「間」というものが感じられない。散文にも散文なりの「歌」があるのではあるまいか。それはリズムであり「間」であり暗示であると思う。とりわけ「間」は作家の文章力の核をなすもので、殆ど本能的なもの、生まれつきの才能に属するものと言ってよい。これがないということは、畢竟現代では作家らしい才能を持った作家がいないということだろう。半作家半評論家の洪水である。

CCLV

ルーヴル河岸に面した角のカフェ。向かい側に塗り替えがはじまった美術館の建物が見える。猛烈な寒さ。建物も石畳も橋もすべて白く凍てついている。白い風景の中に黒っぽい樹木がかすんでいる。空気中の水分が凍ってきらめいて見える。風が強い。白と黒のモノ・トーンの風景の中を、新婚旅行らしい日本人の若いカップルが、ルーヴルからポン・ヌフの方へ歩いてくる。カラフルな防寒着が一際目立つ。例によって女性の方が元気がいい。地図を手にして先に歩き、男性は後ろからついてゆく。午前のこの寒さでは、道ゆく人もいない。わたしもカフェに避難したが、時間にせき立てられる新婚旅行ではそうもいかないのだろう、メトロもバスも使わずに、二人はパリ市中でもっとも寒いセーヌ河畔を黙々と歩いてゆく。ノートル＝ダム寺院へ向かっているのだろう。わたしは温かい紅茶を啜る。銀

の茶器に入ったお湯はいつまでもさめない。ふと、あの二人をここに呼んで、温かい紅茶をご馳走してやりながら、日本の話、フランスの話、男女のこと、人生のことなどを語りたい思いに駆られた。長く寒い冬に閉じ込められてきたからなのだろうか、随分こちらも気が弱っている。

CCLVI

寺山修司。彼の目。挑むようなその鋭い眼光。復讐に燃えた目だ。誰にたいする復讐？幼い自分を捨てて、米兵と逃げた母親にたいする復讐だ。彼の舞台では女はいつも長襦袢の前をはだけて、顔に白粉を塗りたくっている。これは母親の情事を表わしたものだ。鏡も櫛も同じ意味を帯びている。線路を走ってくる無蓋の貨車に乗せられた布団や、川上から流れてくる緋毛氈の雛壇は、母親とのセックスを暗示するものだ（『田園に死す』）。光よりも速く強い言葉を希求したのは、勢いよく射精する精液を願望したからだ。白い原稿紙という女体を、勃起したペンから迸り出るインクという精液で汚すこと、これが、自分を捨てた母親への復讐であった。高校時代の女教師にあれほど膨大な手紙を書き送ったのは、女教師が母親の代替物であったからだ。寺山修司——言葉の狩人。言葉による狩人。その銃口は、文学と演劇の茂みの向こうにチラリと見える、母親の後ろ姿に向けられている。

CCLVII

寺山修司。肝臓病患者。青春期に腎臓病を患ったとき、大量の輸血によって、おそらく肝炎ウイルスに感染したものと思われる。四十代前半で発症。肝硬変へと移行し、死は徐々に、しかし確実に迫っていた。残された命はあと二年。にもかかわらず、彼は六十まで生きようとした。愚かなことだ。現代の医学ではウイルス性の慢性肝炎を治す方法はない。手術は不可能であり、薬による延命治療にも限度がある。二年をどう生きるかを考えるべきだった。体力を消耗する演劇活動などやめて、文筆活動に専念す

べきだった。そうすれば、いまの日本に見られるような文学の衰退は、少しは食い止められたのではないかと残念に思われる。芝居の栄光になにほどのものがあるろう。舞台は泡沫^{うたかた}のうちに消えてゆく。文章は残る。わたしなら、そうする。

CCLVIII

寺山修司。射放たれた矢。的は、ない。世間という空気を切り裂いて、彼ははずことも知れない世界へと消えていった。肝炎に冒されなくても、彼は死んでいたろう。自殺という形で。そんな気がする。

CCLIX

自分の生涯を思い通りに終らせるのは至難の技だ。世間が寄ってたかって邪魔をする。それはより長く生きてもらいたいからだ。一秒でも長くこの世にいてほしいからだ。ベッドに縛りつけられて一秒でも長くこの世にいて、それが何になるというのか。人はこの世に残すべきものがある。それを残さずにこの世と別れることはできない。しかしまた考える。この世に残すほどのなにもものがあるというのか、と。ただ漫然とベッドに横たわったまま、窓辺の鳥の声を聞き、病室の花をながめていてもよいではないか。しかしまた考える。なにほどのものでなくてもよい、この世に書き残したいものを一行でも多く書いておきたい、と。人はそれを煩惱と呼ぶ。

CCLX

フランスは単純明快な国だ。言葉さえ使えれば、言葉によって自分の意思さえ伝えられれば、これほど暮らしやすい国はない。感性や情緒や惻隠の情を捨てさえすれば、そして一種独特の孤独の重荷に耐えることができれば、暮らすにこれほど簡単な国はない。しかしまったく同じ理由で、日本人にとってこれほど暮らしにくい国もないのだ。

CCLXI

二つの微笑。フランス人と日本人の微笑。エレベーターの中にいるわたしに、入ってきたフランス人が微笑みかけた。わたしも微笑みを返す。こちらが乗るときも、先に一人だけ人が乗っていると、相手に微笑みかける。特にメトロのエレベーターなどで。この微笑は愛想笑いではない。自分は怪しいものではないことを相手に示す微笑である。微笑み返すことも同じ理由による。ホテルの廊下などで見知らぬ客と擦れ違うときにもよく微笑み合う。これも、エレベーターの場合ほどではないが、相手に警戒心を起こさせないための謂わばエチケットのようなものである。日本人の場合は殆ど無表情である。とりわけ外国で日本人同士が擦れ違うとき、奇妙な無視が行われる。これなど考える価値がありそうだ。なぜ同国人なのに挨拶もしないのか。外国まで来て日本人の顔など見たくないと思っているのか。不思議な現象だ。逆にフランス人には理解できないのが、外国人を相手にしたときの日本人の意味のない笑いである。道を聞かれてもただ笑っているだけ。島国独特の、外国と外国人にたいする極度の違和感と、同国人にたいする近親的な不機嫌を、こうした行動様式の中にわたしは感じるのだが、思い過ぎだろうか。

CCLXII

二十世紀前半は、政治と革命と戦争の時代だった。この時代は政治家と軍人が威張っていた。二十世紀後半は、経済と風俗の時代だった。この時代は実業家とタレントが威張っていた。経済効率ばかりを考え、富を増やすことのみにあくせくした揚げ句、実業家は虚業家となり、泡のように消えていった。文学者も評論家も映画監督もスポーツ選手も、スタジオのカメラの前で猿芝居を演じるタレントと化して、素人全盛の世の中になってしまった。玄人好みの名人上手はいつしか姿を消してしまった。寄席の衰退にそれは如実に表われている。これは日本ばかりではない。芸術や文化の衰退は、経済不況と同じく、世界全体で起こっていることである。かつ

ての革命や戦争，民族独立の運動や学生運動が世界中で同時多発的に起こったように。

CCLXIII

「何を」ではなく、「如何にして」が現代のご時世である。インターネットを見よ。携帯電話を見よ。その内容のなさを見よ。「何を」がなくなったあとは、もはや残るは「如何にして」のみである。固より内容を失った現代人なるがゆえに、そのようなものに縋る他に手立てがないのだろう。これらの文明の利器は、反って現代人の人間関係の稀薄さ，人格の貧困をよく表わしている。真の小説家も真の読者も生れ出ないはずである。

CCLXIV

暴力，セックス，麻薬，同性愛——この他にどんな若者文化があるというのだろう。若者の音楽も映画もこれらの延長線上にあるにすぎない。希望がない。展望がない。若さがない。絶望もない。個性もなければ，集団的力もない。彼らには政治も思想も文学もない。時代を動かす情熱がない。有史以来，もっとも大人がだらしなく子供ようになってしまった今こそ，世の中を動かす絶好のチャンスだというのに，彼らは何もしない。ただ道端にしゃがんでいるだけである。乞食のように。ないない尽しの現代の若者は，赤ん坊に戻ってしまったのだろう。大人が子供に戻ったわけだから，これは自然なことかもしれない。こうやって文明というものは滅びてゆくのだろう。

CCLXV

思えば，一九九四年十月十一日早朝，シャルル・ド・ゴール空港で腕時計の針を八時間前に戻したとき，わたしのパリ生活ははじまった。これからどのような出会いがあり，どのような出来事が待っているのだろう，と漠然とした思いでゲートをくぐった。すべてが未知の状態だった。日本で

の生活でこびりついた垢を悉く落して、まっさらの状態にあった。空港のロビーに降り立った瞬間から、日本のことはすべて忘れた。たった十時間余でこんなに簡単に忘れられるものかと驚きもした。早朝の空港に人影はなく、滑走路にオレンジ色の常夜灯が明るく灯っているだけだった。

CCLXVI

フランス人にとって花は生活文化に欠かせない重要な要素である。窓辺に花を飾る、食卓テーブルに花を飾る、誕生日や結婚記念日その他節目になるとときには花束を相手に贈る。もちろん恋人に捧げる花は自分の愛情の印に他ならない。昼間の公園に咲き乱れる花壇の花々から、夜のレストランで売られる一輪の薔薇の花にいたるまで、花のない生活など考えられないほどである。しかしこれらの花は日本人が抱く花のイメージとは大きくかけ離れている。彼らにとっての花は、何より陽気で豪華で生の喜びに満ちたものである。室内の装飾の一部であり、人生の装飾の一部である。花の憂い、あるいは花の慎ましさというものは彼らには理解できない。わび、さびなどはなおさらである。花はあくまでカラフルで豪華でなければならない。生の喜びでなければならない。一輪挿しの花など、ただ貧しいばかりで、ない方がまだましだと思うことだろう。これは花の例だが、愛情表現においても、社交においてもこれと同じことが言える。思いやってくれるのを待っていてもまったく無駄なことだ。フランスのアジサイと日本のアジサイの違いである。

CCLXVII

パリ第七大学に隣接して、銀色に輝く特異な建物がある。壁一面にアラベスク模様が施され、窓という窓は、カメラの絞りのような形をしていて、日光の量に応じて自動的に開閉する仕掛けになっているようだ。この建物が、オイル・マネーで建てられたアラブ研究所である。その一階の展示室で、ちょうどドラクロワ展をやっていた。中に入ると、アルジェリア・モ

ロッコ旅行で写生された画家のスケッチが展示されてあった。日本ではなかなか見られない貴重なデッサンばかりだった。茶系統の中に点在する緑と赤が印象的だった。ヨーロッパ人を魅了したアラブ世界の魅力を、このときぞとばかりに誇示していたが、できればアラブ人から見たアラブ世界の魅力も同時に示してほしいかった。彼らの美や真理は、ヨーロッパ人が抱くものとはかなり隔たっているはずだ。出口近くで、売られている書物の中から、コーランの仏訳本を買った。

CCLXVIII

死に襲われるのは生者のみであり、不幸の重荷を考えるのは、幸福な者たちのみである——アランのこの言葉を、わたしは十九歳から二十歳になるとき、自分の日記に書きしるした。まことに青春と不幸は切り離せぬものである。その当時、ただの枕詞としてしか理解していなかった前半部、死と生の問題が、幸福や不幸よりもずっと大きな問題として、いまのわたしの心の中にある。死に襲われるのは生者のみ——慰めの言葉だろうか、諦めの言葉だろうか。

CCLXIX

フランスのアルファベットの活字の美しさ。店の看板から本の表紙にいたるまで、日本での似而非横文字に慣れた目には、心が洗われるほど新鮮に映った。特にポスターの活字の美しさ。デザインといい、配色といい、構図といい、実にしゃれていて、しかもエスプリが感じられる。汚い壁に貼られ、はぎ取られた断片の文字にすら、風味といったものが感じられた。アルファベットの活字の伝統——数少ない文字をどのようにして多様に駆使するか、創意工夫の歴史が、パリの街角のあちこちに見て取れた。横文字で本を出すならフランスだ、とひそかに思ったものだ。

CCLXX

アルビノーニ『アダージョ』——運命と、原罪と、贖罪と、そして諦念。日本ではムード曲のように聞かれているが、石に囲まれたこの国で聞くと、まったく感じが違って来る。この曲は重く、つらい。しかもその重さ、つらさを一種の宿命として受け止めざるを得ないような、仮借なさを感じる。この曲には逃げ場がない。まるで教会の告解所にいるかのようだ。生きていまあることを諦めるしかない、と思わせるような曲だ。

CCLXXI

月が出ている。月を見ると十一年前のモンプリエを思い出す。郊外に近いコロンビエールの宿舎で、御飯を炊いていた。スーパーで買ってきた菓子用の丸い米をテーブルにばらまいて、米の中にわいた虫を取り除いて、共同の台所の壊れた電熱器をなんとか操作して、ミルク沸かしでお粥のような御飯を炊いていた。三階の台所の窓から外を見ると、丘陵地になった林の向こうの空に、静かな月が出ていた。ふと、『荒城の月』のメロディーが口をついて出た。それ以来、ポール・ヴァレリー大学の長い塀の道を通うたびに、この歌を歌っている自分に気づいた。気づかぬうちにいつの間にか歌っていたのだ。日本が恋しい、という思いだった。日本人にとって、月とは特別の意味を持つものなのだろう。

CCLXXII

ベルピニャンに行く途中、乗換えて一時モンプリエの駅に降りた。懐かしい構内。あまりの懐かしさに、外に出てみたくなった。南仏の春らしく、ミストラルが吹いていた。前かがみになって、駅前の短い上り坂の通りを、コメディエー広場の方に上っていった。広場の風景は十一年前と少しも変わらなかった。もっとも、パリの広場を見慣れていたので、コメディエー広場が思ったよりもずっと小さな広場だったことにやや驚きはしたが。昔そのままにモノプリもある、カフェの「オ・トロワ・グラス」もある。苦勞

した夏の日々が思い起こされた。郵便局で懐かしげに日本語で話しかけてきたフランス人の老人。彼は旧制高校時代に中曾根元首相にフランス語を教えた経験を持っていた。日本人の奥さんを交えて、「ピザ・パパ」という店で一緒に会食した懐かしい夕べのこと、産婦人科の病院に妊娠三ヶ月の妻を連れていったときのこと、ベルナールと出会い、彼に日本語を教えた午後のこと、その他さまざまなことが思い出された。広場に佇んでいたのはほんの二、三分だったが、その短い間に、あの暑かった二ヶ月の生活の隅々までが思い出されるようだった。わたしが最初にフランスと出会ったのが、この町だった。

CCLXXIII

明治以来、日本の知識人や芸術家が挑んで、そのたびに跳ね返されてきた「ヨーロッパ」というものを考える。日本の伝統をいったん全部捨て去って、その上でなければ挑めなかった日本人の弱点を考える。他の東洋人やアラブ人は、自国の言語、文化、宗教、習慣をそのまま保持しながら、ヨーロッパから多くのことを学んでいった。日本人にはなぜそれができないのか、不思議なことだ。羽織袴姿でもヨーロッパから学ぶことはできるはずだ。丸ごとヨーロッパ人になり切れなければ、ヨーロッパから真に学ぶことはできないという固定観念があるのではあるまいか。それが壁となって日本人を跳ね返してきたのではないか。如何にヨーロッパ人に同化しようとしても、ヨーロッパ人そのものにはなれない。自明のことである。この自明のことが、日本人には理解できていない。いや、理解していても、それでもあえて挑むのだ。かくして、明治以来繰り返されてきたことをなおも繰り返すことになる。すなわち、極端な欧米崇拜者になるか、極端な国粹主義者になるか。

CCLXXIV

眠られぬ夜。ジュールダン通りの車も静かになった。壕の底に残ったワ

インを飲み干す。不眠には慣れていますが、異国での不眠にはまた別種の趣がある。一人取り残されているという孤独感はあまり感じない。昼間でもそれは同じだから。パリの真夜中を起きているというのは、贅沢な話である。夜が不毛であること以外、何の不満もない。まだまだ旅行者の域を出ていないのかもしれない。生活者としてパリで不眠の夜を過ごすのは、あるいはわたしには耐えられないことかもしれない。友人は二十年以上、それに耐えてきたのだらうと思うと、畏敬の念すらおぼえる。

CCLXXV

Y新聞社の特派員から欧州版に掲載する三回分のエッセーを頼まれた。いままでの執筆者が帰国したため、代わりに書いてくれと言う。前任の執筆者は日本で名の知れたヴァレリー研究者であった。彼のエッセーを読ませてもらった。パリ国立図書館の閲覧について書かれたもので、文章の端々に深い学識と育ちのよさが窺われた。このような折目正しいエッセーの後を引き継いで、わたしのようなものが粗雑なことを書き綴ってよいものか、少々ためらわれたが、思い切って引き受けることにした。第一回目はパリの春の訪れについて書いた。見ているようで見ていない、自分の目の曇りに苛立った。わたしは何も見えていなかった。そのことを教えてもらっただけでも引き受けてよかったと思った。日本語は、知らぬ間に語彙がひどく貧しくなっていた。

CCLXXVI

言葉の切っ先が鈍っている。精神が鈍麻しているからではない。感性が摩耗しているからでもない。知性が衰弱しているからでもない。それらは、はじめからその程度のものだ。言葉の切っ先が鈍っているのは、フランス語で生活しているためだ。母国語のもつニュアンスや想像力を故意に扼殺して、フランス語の論理性と構成力の中に身を置き、居心地の悪いその場所を無理強いに己の居場所として、平静を装って生活しているためだ。フラ

ンスにいて、日本語で文章を書くのは、至難の技だ。

CCLXXVII

フランスにいて日本語で文章を書きつづけるのは難しい。いま書いているその日本語が本当に日本語として正しいものか、自然なものか、次第に自信がなくなってくる。代わりにフランス語が身近になる。しかしそのフランス語はフランス人のフランス語ではない。一種のコロニアルの文章だ。かくして、母国語を失い、外国語を似而非母国語として生活してゆきながら、己の中に植民地化された文化圏が出来上がる。

CCLXXVIII

「目には目を——」イスラムの教え。あるいはユダヤの民の教訓。異民族間の抗争が絶えなかった時代には、これでなければ生き抜くことはできなかった。そこへ、イエスが現われ、「右の頬を打たれれば——」と説いた。この言葉の新しさ、というより不条理に人々は目をみはった。現在では、両頬よりも目と歯の伝統のほうが根強く残っている。「譲歩」よりも「対抗」でなければ生きてゆけないのだ。旧約聖書の時代から人間の在り様は基本的には殆ど変わっていない。日本が被曝したとき、世界の世論は、真っ先に核武装する国は日本だ、と信じた。それが彼らのやり方なのだ。交通事故を起こしても決して謝らない。これも同じ理屈による。自己の利益や権利を守るためには、万難を排して武装する。論理には論理で対抗し、テロには爆撃で対抗する。

CCLXXIX

ここでは右と左が反対だ。車は右側を走り、踏切りでは一時停止せず、黄信号では急ブレーキで停止する。歩行者は車が来なければ赤でも渡る。日本人が照れて笑うところでは笑わず、日本人が無愛想に笑わないところで微笑する。客のほうで礼を言って、店員や窓口係は横柄にうなづく。清

潔好きの日本人は毎日風呂に入るが、彼らは汚いトイレでも平気である。その一方で、日本の街路は不統一で汚く、ヨーロッパの街は（汚いので有名なパリでさえ）見事に整備され、建物の高さと色が規制されている（マクドナルドもよく見なければすぐには分からない）。日常生活の不便を不便と感じず、建物の構造を変えてまでしてエレベーターを新設しようとはしない。行政の判断は現場の人間に一任されている。彼が「ウイ」と言えばそれで決まる。ただし実行はきわめて遅い。午前中に必ず配達すると約束した荷物を、フランス人が持ってきたのは、午前十一時五十分頃だった。確かに午前中には違いない。握手をすることは親しさの表現であるよりも、親しくないことの表現であることが多い。少なくとも日本人が信じているよりも彼らは親しいとは思っていない。握手と接吻に対する日本人の誤解がここにある。普段やり慣れないことをやっているからだ。右を左として、左を右として生活してゆく。外国人として。精神の方位がばらばらになる。

CCLXXX

一九九三年に国籍・移民法の改正、いわゆるパスクワ法が施行されて、以来外国人にたいする監視が厳しくなったと言われる。わたしがパリにくる一年前のことだ。滞在許可証もなかなか下りず、許可証の更新も難しくなったらしい。不法滞在者にたいする密告、官憲による拘束、国外追放など、ミッテランの社会主義政権が成立した十数年前には考えられないことが起こっている。政権成立直後に友人はすぐに労働許可証をもらえたが、いまならとても無理だとわたしに語ってくれたことがある。日本人が身分証明書の提示を求められたり、身柄を拘束されたりすることはあまりないが、わたしはときおり職務質問を受けることがある。R E Rのサン＝ミッシェル駅の爆破事件のときは特に厳しかった。鞆の中まで調べられた。日本人に見えなかったからだろう。パスクワ法には、保守的なフランス人が外国人、とりわけアラブ人、黒人、東洋人に抱いている嫌悪と不潔感がよく表われている。この法律のせいかどうか、十五区や十六区のレストラン

でよく差別的扱いを受けた。ポルト・ドルレアンやブローニユのレストランの親父はあからさまに質の悪い食事をわたしに持ってきた。汚い外国人は出ていけと言わんばかりの目つきをしていた。あの目つきは忘れられない。

CCLXXXI

反語。死についてもっとも多く思索した哲学者が、もっとも強く生に執着した哲学者だとするなら、生についてもっとも多く言及した小説家は、もっとも強く死に惹かれた小説家ということになろう。わたしは太宰治のことを考えている。反語をもってしか生きられなかった人間の、その逆説的人生のアクロバットの悲しさを。サーカスの綱渡りの道化師の身振りを。彼は最後に必ず墜落してみせる。観客を喜ばせるために。

CCLXXXII

「正しく見るには二度見直せ。美しく見るには一度しか見るな」——アミエルの言葉。つまり美は誤謬から成っているというわけだ。正確に見ようとするればすべてが醜と化すというわけか。いや、美は存在せず、醜こそがものの本質と言いたいのだろう。生涯独身だった理由もうなづける。ドイツ観念論に惹かれつづけた哲学者であるが、この皮肉に満ちた言葉の中にはフランスモラリストの顔が透けて見える。

CCLXXXIII

アミエルの真理と美の相反について。一度見たとき、それは美であった。二度目に正しく見たとき、それはもはや美ではなかった。美ではなく、真理であった。真理は美ではなく、醜であった。それが人生の意味であった。美は虚妄であり、一回限りの刹那的なものであり、すなわち恋愛であった。したがって、恋愛と人生とは相容れない。

CCLXXXIV

わたしが死ぬとき、その間際に見る幻想—— 人気ない大学構内の中庭を一人歩いている。みんなはどこへ行ってしまったんだろう。新芽の出はじめた立ち木が立っているだけで、誰もいない。

CCLXXXV

疲労。古代ギリシア・ローマから連綿と続くヨーロッパの伝統の重荷から生じる精神的疲労。論理学と修辞学の伝統から生じる哲学的疲労。キリスト教の伝統から生じる宗教的疲労。そればかりではない。肉食の過剰から生じる胃腸の疲労。磨り減った螺旋階段を踏みしめるごとにギシギシと軋む音は、あれは伝統に押し潰された人間の精神と肉体の軋む音だ。

CCLXXXVI

カメラやカセットのように、人生にも「残量」が計時されればどれほど助かることか。あとは逆算してゆけばよいのだから。逆算して、やるべき仕事を整理し、完成させることができる。それほどの仕事があれば、の話だが。

CCLXXXVII

肝硬変。緩慢に、しかし確実にやってくる死。早く死にたければ酒を飲めばよい。自分の人生の「残量」は自分の思うがまま。毒入りの美酒に酔い痴れながら贅沢に死んでゆくこの自殺には、残念ながら未練がましいナルシズムが辟易するほどある。

CCLXXXVIII

死とは何か。終り。生とは何か。始まり。この世に生を受ける以前の未生とは何か。始まりも終りもない世界。再び問う。死とは何か。この世に生を受けなければ存在しなかったもの。死とは、この世に生を受けたこと

の証し。しかし、死後の世界は何もない世界。

CCLXXXIX

さらになおも問う。人はどこへ行くのか。ゴーギャンの言葉を思い浮べる。謎は深まるばかり。何もない世界とはどんな世界なのか。無さえ存在しない世界とは。疑念は膨らみ、迷いはさらに深くなり、未練が取り憑く。生への未練が。

CCXC

レオミュール通りの群れ飛ぶ鳩。狭い空。無音の世界。